



フィリピンの地方政治とエリート家族 : A・マッコイ編『家族のアナーキー : フィリピンにおける国家と家族』をめぐって (アジア社会論)

長坂, 格

(Citation)

社会学雑誌, 14:194-206

(Issue Date)

1996-10-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010889>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010889>



フィリピンの地方政治とエリート家族

— A・マッコイ編『家族のアナーキー…フィリピンにおける国家と家族』をめぐって —

長坂 格

神戸大学大学院文化科学研究科

はじめに

最近、フィリピン、ピサヤ地方の社会史的研究を精力的に行ってきたA・マッコイの編集による、『家族のアナーキー…フィリピンにおける国家と家族』(McCoy, A. ed. *An Anarchy of Families: State and Family in the Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1994)が刊行された。本稿では、このマッコイの編書を題材として取り上げ、その内容を批判的に検討することによって、フィリピンにおける地方政治研究の動向の一端を明らかにすることを試みる。

内容の紹介に入る前に、本書をここで検討の対象とする理由について、二点挙げておく。一つは、研究の蓄積がそれほど多くないフィリピンの各地方のエリート家族が、本書では本格的に分析されていることである。こうしたエリー

ト家族への着目は、家族を基盤とした寡頭支配がフィリピンの歴史の重要な要素となっているという点〔19〕からだけでなく、フェガンが指摘する「フィリピン人は政治の連続性を家族成員の中での権力の委譲という観点から語り、政治的な争いを複数の家族の間での競合という観点から語る」〔41〕という点からも意味を持つであろう。今一つは、本書に収録されているほとんどの論文の中で、従来あまり着目されてこなかった政治家による暴力やレント・シーキングが、歴史的なコンテキストの中で具体的に記述分析されていることである。この点は、フィリピンの地方政治の研究史との関連で改めて触れたい。

さて、次に本書の内容を要約していこう。その際、まず本書全体を貫く枠組みを、編者であるマッコイが執筆した最初の章の内容をやや詳細に紹介し、次に事例研究である他の章をまとめて紹介することにする。

一 弱い国家と強いエリート家族

本節では、マッコイによる本書の冒頭の論文、「家族のアーキー…ファイリピンにおける国家と家族の歴史叙述」の内容を要約する。

まず、マッコイは、第三世界の歴史においてエリート家族―家族を基盤とする寡頭支配層 (family-based oligarchies) ―が重要な役割を果たしている現状を指摘した上で、ファイリピンについては、エリート家族の動態と地方政治過程とを結び付けた考察がほとんど行われてこなかったと述べる。このような研究状況において、彼は、ラテンアメリカのエリート家族の研究を参照しつつ、「弱い国家」(weak state)と「強いエリート家族」(strong elite families)というキーワードを設定した。

最初に、後者の「強いエリート家族」についての説明から見ていこう。ファイリピン人は歴史的经验から、先進国では国家が担うような社会的サービスを家族に頼ることを学んできたという。すなわちファイリピン人の家族は、「子供に職業、資本、教育を与えて社会化し、病気のケアを行い、障害者や高齢者を保護し、そして何よりもその姓、名譽、土地、資本、価値を次世代に伝達することに励む」[8]。こうした状況において、政党だけでなく、銀行や企業、さ

らには労働組合やキリスト教会、共産党の歴史さえもが少数の家族と分かち難く結びついてきたことが説明される。

それでは、ここで用いられているファイリピンの家族はどのようなものか。彼は、人類学者の分析を援用して、ファイリピンにおける親族組織が一般的に双系制であり、社会的ネットワークを広げていく一方で世代意識が深まらないという特徴を持っていること、個々のファイリピン人はこうした双方的に広がるネットワークの中で政治的な同盟者を選択していくこと、などを指摘する。その上で、彼が本書で用いる家族を次のように説明する。「家族の政治的な役割を表現するような用語を求めるとすれば、それは親族ネットワークであろう。それは血縁、婚姻、儀礼によって結びつくより大きな集団から形成される政治的な連合体 (working coalition) である」[10]。つまり、ここで彼がいう家族とは、双方的に広がる親族関係と婚姻によって結ばれる姻族の中から任意に形成されるゆるやかな政治的な連合体であり、可塑性、流動性によって特徴づけられるものである⁴⁾。

さて、こうして説明されるエリート家族は、次に「弱い国家」としてのファイリピン国家のコンテクストの中に位置づけられる。ファイリピンにおける強力な政治家族 (political family) の形成の要因として挙げられるのは、国家経済の中でレントがかなりの割合を占めていることと、

中央政府による地方へのコントロールが弱いこと、の二点である。この二つの要因は次のような歴史的過程の中で形成されたと説明される。

フィリピンの植民地統治期では、スペインもアメリカも自国の制度を本手に強力な官僚制を作ろうとしていた。しかし、アメリカは一方でスペインから受け継いだ官僚制を拡大させながらも、他方で町レベルから国家レベルへという順序で徐々に選挙政治を導入していった。こうしたアメリカ統治期の選挙政治の導入は、地方のエリート家族の自律を高めることになった。このような事態に対してアメリカは、国家警察軍や会計検査官などを用いて、地方勢力を抑制していた。しかし、一九四六年の共和国独立以降、官僚制が相対的に弱体化したこと、大統領は当選するために地方エリートに依存せざるをえないこと、さらにはアメリカによる戦後復興援助や日本の賠償金などによって比較的財源は豊富であったことなどから、地方エリートによるレント・シーキングが活発となり、同時に地方エリートの自律のさらなる増大がみられた。武装した私兵を保有し、暴力によって地方を事実上支配する、いわゆる「ウォーロード」が出現するのはこのような状況においてであった。

三〇年代以降初めて政治権力の集権化が行われたマルコス期では、こうした寡頭支配打破が掲げられ、実際に多くの地方のエリート家族が戒厳令下において攻撃を受けたが、

レント・シーキングの遍在という構造自体は変わることがなかった。続くアキノ政権は、憲法で大統領の親族が閣僚などの役職に就くことを禁止するなど、「反王朝政治」(anti-dynastic)をうちだしている。しかし、共産主義勢力と軍の間に挟まれ、地方エリートに依存せざるを得ない状況で、戒厳令体制で痛めつけられたエリート家族が徐々に復活していった。

以上のような一般的な歴史的過程を踏まえ、本書全体に関わる次の四つの仮説が提示されている。すなわち、①家族を基盤とした寡頭支配は、フィリピンの歴史において重要な因子であること、②これらの家族の間の関係はフィリピンの政治に多大な影響を及ぼしてきたこと、③双方親族を中心に組織されるエリート家族は、政治の場に派閥主義をもたらし、④レント・シーキングを行う強力な家族と弱い国家との関係は相乗効果を持つこと、である。こうした仮説に基づいて、本書では、フィリピンの歴史を、国家レベル、地方レベルで主要な役割を演じてきた特定の家族のリーダー達から描き出すことが試みられる。以下、各地方のエリート家族の事例が検討されている残りの八章の内容を紹介していこう。

二 エリート家族の諸相

フェガン (B. Fegan) による「投票と暴力の企業家」は、中部ルソン地方の一村落に基盤を持つグスマン家 (de Guzman) の三世代を対象としている。彼は、従来の地方政治研究では、地主—小作関係の中間に位置する管理人や武装した私兵の存在が軽視されてきたと主張し、大土地所有者の管理人あるいは私兵として地位を築いたグスマン家二世代の五兄弟を中心に取り上げている。一九世紀末には一・五ヘクタールの天水田を所有する農家に過ぎなかったグスマン家の第一世代であるが、六〇年代までには、デレオン家などの大地主に雇われることによって、あるいは第二次大戦のゲリラ経験や農民反乱への参加や他の暴力行為などを通して勇敢 (matapang) という評判を得ることによって、さらには政治的役職を得ることによって、二世代のグスマン兄弟は影響力を拡大させていった。戒厳令による集権化過程でグスマン家が影響力を行使する場面は少なくなつたが、八〇年代以降は、三世代のルビオンが町会議員に選出されるなど、再び町、村レベルの政治で影響力を回復させた。

フェガンは、こうしたグスマン家三代の歴史を検討して、経済的基盤に乏しく、双方親族もさほど多くなかつたグスマン家の政治的成功を、政治的企業家としての成功、すなわち他の多くの家族に庇護を与えてきたことに求めている。また、リーダーイメージ等に関する現地語彙が数多く収録

されており、グスマン兄弟がそうしたイメージを時々の政治状況に適応させることによって影響力を拡大させてきたことが論じられている。こうした既存のリーダーイメージの戦略的適用に関する徹視的な研究はほとんどなされておらず、今後さらに行われる必要がある。

サイドル (J. Sidel) による「ビッグマンの近くを歩く」は、カビテ州の J・モンタノ (J. Montano) のコムンウェルス期から戒厳令までの政治的経歴を、カビテ州、フィリピン の歴史と対応させながら記述している。

具体的には、三四年に下院議員に当選して政治的経歴をスタートさせたモンタノと、戦前ではフィリピン革命の指導者であつたアギナルド、また独立後ではアギナルドの後継者であるカメリノ等との政治的争いが、暴力の使用といった側面も含めて記述されている。ここでは、大統領のパトロネージを得た派閥がカビテを支配する構図が詳細に論じられている。最後にサイドルは、ネグロスやタルラクのような大規模なアシエンタを欠くカビテでは、選挙などにおける脅しなどといった暴力的な手段、さらには議員の立場を利用した不動産投機や不法経済の保護などを政治的地位の基盤とせざるをえないので、国家の様々な関係部局との協力・共謀、すなわち国家権力のパトロネージが決定的に重要となると述べている。実際、マルコスが彼の敵対するカメリノ派に国家のリソースをまわし始めるとモンタノ

は壊滅した。この論文では、地方エリートの地位が中央との関係によっては非常に不安定であることが端的に示されるとともに、マニラ近郊の開発の進展に伴って政治的争いが激化していく様子が述べられている。

カリネイン (M. Cullinan) による「クライアントとしてのパトロン」は、セブ州ダナオ市を拠点とするウォーロードとして知られる R・ドゥラノ (R. Durano) について論じている。内容的には、セブ市を地盤とするクエンコ家との連合、日本占領時代のゲリラ活動と敵対する有力者の処刑、独立後の自らの派閥の形成、大統領によるパトロネージをめぐる争い、などといった点が順に述べられている。

カリネインはその考察の中で、卓越した集票能力、すなわち票を自分自身、家族、さらには中央のパトロロンに分配する能力がドゥラノの地位を作ったと述べている。事実、ドゥラノの地位がもつとも不安定であったのは、選挙が停止されていた戒厳令期の最初の六年間であった。それではこうした選挙での強さを支えたものは何か。

まず第一に、政治的地位を築いていく過程で得た経済的基盤が挙げられる。大土地所有がみられなかったダナオにおいて、ドゥラノ家の経済的基盤の主要なものは、政府の援助によって急成長したダナオ近郊の天然資源を利用したセメント会社と砂糖生産であった。こうして得られた利益は、さらなる家族の支配のために再び選挙につき込まれる

ことになる。第二に、選挙に関わる大規模かつ組織的な不正と暴力がある。その背景の一つに、ダナオが長きにわたる銃製造の中心地の一つであったことがある。ドゥラノは銃産業を手中に収めることによって、経済的利益を得るだけではなく、選挙の際などの武器の確保を確実なものとしていたという。そして第三に挙げられるのが、ドゥラノが、ダナオを六一年に市に昇格させ、完全に支配下に置き、あたかもアシエンダのようにしたことである。市の職員から学校の掃除夫までの任命権が、事実上すべてドゥラノによって握られていたという挿話は、ドゥラノ家のダナオにおける力を端的に表しており、ダナオの票をドゥラノが独占的に操作することが可能であったことを物語る。

この論文では、地方の政治家が大統領のパトロネージをいかに得るか、そしてその援助によってどのようなリソースを獲得することができるか、という点に関する具体例が歴史的に検討されている。

ベントレイ (G. C. Bentley) による「ムハマド・アリ・ディマポロ」は、「ミンダナオのマルコス」とも呼ばれるマラナオ・ムスリムであるディマポロを対象としている。

ここでは、ディマポロの政治的経歴、すなわち日本占領下での日本軍襲撃、クリスチャンのエリート家族の援助による選挙、七〇年代以降のマルコスとの連合、さらにはアキノ政権での生き残りなどが、クリスチャンとムスリムの対

立が次第に顕在化していったこの地方の歴史的コンテクストの中で述べられている。

ベントレイは、この系譜的にも卓越しておらず、裕福でもなかったディマポロの政治的成功について、「マラナオのダトウシップの典例」[278]を実践した結果であると述べている。すなわち、彼は普通の人々が決して持つことのできないような能力を見せ続けるという形で——秩序の守護者であると同時に破壊者たり得る——、伝統的な觀念やシンボルを大きく変化させた政治状況に適用することによって政治的地位を築いてきたのである。

ベケット (J. Beckett) による「コタバトのムスリム・マギンダナオの政治家族と家族の政治」は、他の論文のように一つの家族を中心に記述するというスタイルをとっていない。内容的には、アメリカ期からのコタバトの主要な政治家の変遷が、開拓の進展や七一年からのクリスチャンとムスリムの紛争、さらには七九年の地域議会の開設など、この地方特有の背景の中に位置づけられている。結論部分では、姓に関する議論が展開されている。マギンダナオのエリート達の間では、姓をどのように名乗るかということに関する共通理解はなかったという。ある者はムスリムの平民と同様に父親の名前を姓として、ある者はクリスチャン式に姓を名乗った。このような状況で、姓の選択は自らの政治的正当性を主張する手段となり、三世代上のスルタ

ンの名を姓とすることで家族内部での政治的地位を主張した者もいた。著名な名を姓とすることが、かつてのタイトルのように家族の政治的な連続性を主張することになるという指摘は、系譜に基づく伝統的な差異化のシステムを現代の社会状況に適応させている事例として注目に値する。

モハレス (R. Mojares) の論文は、セブの有力家族であるオスメニャ家 (Osmeña) の三世代を取り上げている。オスメニャ家は、コモンウェルス期の副大統領と大統領を務めたセルヒオ、その息子で上院議員であったセルヒオ・ジュニア、ジュニアの甥でそれぞれ上院議員、セブ州知事であったジョンとエミリオなどの有力政治家を三世代にわたり複数輩出してきた。こうした一世紀近くにはわたる著名な政治家族としての連続性は、後に触れるロペス家のような卓越した経済力によっても、先に紹介したドウラノ家のような伝統的なパトロネージによっても説明できないという。むしろオスメニャ家の政治家達が成功を取ってきたのは、セブ市という都市化された社会の中で、選挙に勝つためのイデオロギー的なアピールを巧みに行ってきたことと、そうしたアピールを行う組織的基盤 (集票マシン) を持ち続けていたことによると筆者は述べる。加えて、セルヒオとその息子のジュニアの対立関係などに代表されるように、「オスメニャ家は凝集性の高いユニットとなったことはほとんどなかった」[317]。また、オスメニャ家の政治家達

は三世代にわたって公共事業と結びつく形での不動産投機によって富を蓄積してきたが、だからといって必ずしも単なるレント・シーカーではなく、自らの利益と公共の利益とを巧みに組み合わせるべくことによって「私利私欲のない」経済政策の遂行者というイメージを植え付けるようにしてきた。そして最後に筆者は、オスマニヤ家の政治家達には、「新たなメッセージを加えたり、選挙運動のスタイルを変えてみたり、新たな争点を持ち出したりすること」[343]、新しい状況に対応していったと述べている。本書収録の他の論文がとっているような、親族や家族を鍵に政治を読み解こうとするアプローチの限界を指摘した論文である。

バルデス (R. Paredes) による「イルストウラードの遺産」は、スペイン統治時代からの著名な家族であるパルド・デ・タベラ家 (Pardo de Tavera、以下タベラ家と記す) を対象としているため、扱う時代も他の論文より長く、一九世紀の中ごろから九〇年代前半までとなっている。スペインに起源を持つタベラ家の中のフィリピンにおける主要な人物は、一九世紀後半のスペインの植民地統治に改革をもたらそうと試み、後にカビテ暴動によってマリアナ諸島へ流刑されたホアキン、ホアキンの甥でソルボンヌ大学で医学を修め、後にフィリピン行政委員会のメンバーに任命された T・H (Trinidad Hermenegildo)、そし

て T・H の孫であり、アキノ政権で社会福祉開発長官に任命されたミタ、の三人である。この三人に共通するのは、「高学歴、高い役職、エリートとしての社会的地位」である。前二者の時代のタベラ家は、その卓越した系譜、マニラの商業地区開発によって得た富、そして植民地行政における高い役職などによって名家として存続した。T・H がフィリピン行政委員会を解任された一九〇九年以来、長期にわたりタベラ家から高い役職に就く者はいなかった。しかし八六年に医者であるミタがアキノ政権の閣僚となったことで、タベラ家はその地位を回復させた。

バルデスは、このようなタベラ家の復活ないしは名家としての存続の要因として、高学歴と高い役職によって特徴づけられるイルストウラード (スペイン時代末期の開明的知識人) の遺産を挙げている。ミタによるタベラ家の復興は、このイルストウラードの伝統を伝えていこうとしたミタの両親の世代の戦略に帰するところが大きかったと述べられており、フィリピンにおける植民地時代からの名家の生き残り戦略の一つの形が明らかにされている。

最後のマッコイによる「レント・シーキング家族とフィリピン国家」は、パナイ島イロイロ市のロペス家 (Lopes) について論じている。記述の中心は、実業家であったユーヘニオと副大統領となったフェルナンドの二人の兄弟である。

砂糖農園を所有するロペス兄弟は、二八年に、自ら所有する新聞で、当時のイロイロ州知事を攻撃し、辞職に追い込んだ頃から頭角を現し、その後イロイロ周辺の農園主や政治家、さらにはケソンのような中央の政治家と連合を組むことで勢力を拡大させていく。独立後、兄弟はマニラに拠点を移し、弟は政治家として副大統領、上院議員を務め、兄は実業家として新聞、ラジオ、テレビなどの会社を買収し、さらにマニラ電気会社などを手に入れ事業を拡大した。マルコスとは当初連合関係にあったが、次第に対立が深まり、戒厳令期にロペス家はマルコスの主要攻撃目標となった。アメリカにおける反マルコス活動を行っていたロペス家は、ユーヘニオが病死したものの、アキノ大統領就任後にその子供達がマルコスに接収された企業の経営陣として任命されるなどして復活を果たした。

マッコイは、こうしたロペス家の事例を、弱いフィリピン国家と強いエリート家族の共存の端的な例として分析する。ロペス家の急激な事業の拡大は、第一に、製糖産業への早い参入に示されるように常に新技術を積極的に導入したことで、第二に、さらに重要なのは、国家の財政や権限を自らに有利となるように活用し得たことよって説明される。その意味でユーヘニオは独立後戒厳令までの間でもっとも成功したレント・シーカーであるという。

三 コメント

以上は、フィリピンのエリート家族の八つの事例とその分析の紹介である。マッコイが最初の章で指摘したように、エリート家族を対象とした本格的な研究はほとんどなされていないなかったので、本書がフィリピンの歴史における地方エリート家族の重要な役割を具体的に論じた意義は大きいものと思われる。各事例の分析に対する疑問もないわけではないが、以下では、紙幅の都合もあり、本書全体がフィリピンの地方政治研究にとつてどのような意味を持ちうるのかという点に限り、これまでの研究史を参照しつつ若干の検討を行いたい。

中部ルソン地方での現地調査に基づき、七〇年代以来フィリピンの地方政治研究をリードしてきた政治学者カークフリートは、フィリピン政治の研究史を振り返った論文で以下のように述べている。「三〇年前にフィリピン政治の一つの理論が登場し、現代に至るまで強い影響力を持ってきた。……その議論とは、フィリピンの政治は個人的な関係と個人の連合によって構成される派閥を中心に展開するというものである」[Kerkvliet 1955: 401]。一般には「パトロン-クライアント関係モデル」(以下PCモデル)や「クライアンティリズム」などと呼ばれるこの分析

枠組みは、一九六五年のランデによる先駆的研究において最も明確に表現されている [Lande 1965]。

ランデのフィリピン政治分析の特徴は次の二点にあると思われる。すなわち、①派閥、パトロン・クライアント関係、双系制といった鍵概念を多用し、フィリピンのあらゆるレベルの政治構造（主に政党の構成）に一貫したモデルを提供したこと、②そうしたモデルを農村の社会構造から引き出していること、である。こうした視点から、地方派閥は、富裕な家族が中心となって他の家族を引き付けているルースな家族の集まり (family constellation) であること、このような派閥の地方レベルにおける対立の累積が二大政党による中央での対立となること、などが説明された。こうしたランデに代表されるPCモデルは、その後スコットによる理論的な精緻化⁵⁾を経て、戒厳令以前のフィリピンの政治構造を説明するモデルとして強い影響力を持ってきた⁶⁾。

本書は、このようなPCモデルに基づく諸研究と、親族・家族関係の強調などいくつかの点で共通している。そのため、選挙においてはパトロン・クライアント関係や家族を基盤とした派閥への帰属のみが重要なのではない、あるいは政策的争点、政治的理念も持たない政治家像が出てこざるを得ない [Kerkvliet 1995: 406] などといったこのモデルへの批判がそのままではまることになる。実際、

ロペス家の研究をしているロセスは、「それぞれの政治家が大統領（常に究極的なパトロンとして理解されている）と緊密なつながりもっていたという本書の主旨は、派閥モデルに属するものであり、何ら新しい洞察をもたらしていない」 [Roces 1993: 1322] と述べて本書の枠組みを批判し、その中であってモハレスがオスマニヤ家のイデオロギ―に焦点をあてた点を高く評価している。確かに、前節でも触れたように、モハレスは、オスマニヤ家がパーソナルな関係だけでなく、政策やイデオロギ―を用いてその政治的地位を保持・存続させた点を強調しており、家族・親族関係の重要性を強調する本書全体の枠組みを相対化しているといえる。結局、本書は、PCモデルがあまり扱わなかった問題（政策、エスニシティ、政治家の理念など）を分析に取り込んでいくこうとする動き⁷⁾に対してほとんど注意を払っていないといつてよい。九〇年代に入り、親族政治 (clan politics) や家族の政治といったテーマの研究が再び盛んとなったのは二月革命以降の現状を反映してのことであるという指摘 [Rocanora 1995: xxv] もあるものの、地方政治の分析における家族・親族関係の重視は、本書の大きな魅力であると同時に批判を受けやすい点ともなっている。

しかし、本書は、PCモデルにおいてはあまり問題とされないフィリピンの地方政治の特徴——暴力と強制——を正

面から取り上げているという点で、このモデルとの違いを見せている。PCモデルでは、政治家と支持者の関係を基本的に「互酬的」なものとして把握するために、例えばフイリピンの選挙の特徴として一般的に語られる「買収 (gold)」、恫喝 (goon)、「暗殺 (gun)」という要素は軽視されざるをえない。それに対して、カークフリートが「エリート民主主義アプローチ」と呼ぶ立場は、エリート家族などによる暴力や強制、買収などの役割を重視する。マッコイも「二つの要素—政治的暴力とレント・シーキング—が多く政治家族の歴史にとってもっとも重要であるようにみえる」[21]と述べ、これらの要素を強調しているし、サイドルはこうしたアプローチの提唱者の一人でもある。[Rocamora 1995: XXII]。かくして、グスマン兄弟についての数々の武勇伝(フェガン)、ドウラノの大量の私兵や銃の密造(カリネイン)、モンタノとカメリノの私兵を用いた戦い(サイドル)、デイマポロによるMSUの守衛の私兵化や選挙における殺人事件、また誘拐との関わりの可能性(ベントレイ)、ロペスの戦前のバス会社の買収に絡むやくぎ者の利用(マッコイ)などが、様々な資料を用いて論じられている。これらは、一般に「ウォーロード」などと呼ばれ、事実上の自治を保持してきた地方有力者(家族)に関しての数少ない学術的な報告であり、フイリピンの地方政治の動態を知る上で貴重な事例を提供して

いると評価することができる。⁽⁸⁾

しかし、そこに疑問がないわけでもない。それは、マッコイらがこうした地方政治における暴力の遍在を強調するあまり、政治家による勢力拡大のための他の戦略を軽視し過ぎていてのではないか、という疑問である。例えば、カビテ州のモンタノのもとで政治的経歴をスタートさせ、後にマルコスに引き立てられたレムリヤについて論じているコネルは、レムリヤによる暴力や脅しの使用に触れつつも、「レムリヤが単に恐怖だけで「カビテを」支配したと考えるのは間違いであろう」[Coronel 1995: 17]と述べ、レムリヤが一週間に四回、役所と自宅で住民の陳情を聞いていることを記している。こうしたことはデイマポロやモンタノ、ドウラノらには妥当しないのであろうか。カリネインはドウラノによる膨大な寄付行為について述べているが、教会組織との関係を構築するためという視点でしか論じていないマッコイもこのドウラノの寄付行為に関しては、「バトロンであったガルシア大統領からの融資によって得た」富は、ドウラノが慈善家としてのポーズをとること「を可能にした」[22]と述べるだけで、なぜドウラノほどダナオ市の完全支配に成功した政治家がさらに膨大な寄付行為を行うのかということには触れていない。フイリピンの地方政治研究において暴力の使用や不正がいかに行われているかを解明することは重要な課題ではあるが、政治家

族による支持調達のメカニズムの多様性、あるいは複雑さを明らかにしていく作業も同様に重要な課題であると思う。

このように見てくると、エリート家族がその時々々の政治状況に合わせて多様な戦略（多くの場合複数の）を用いてきていると考えた方が生産的であるように思える。ランドエが強調する地方政治過程における家族を基盤としたパトロン・クライアント関係も、サイデルらが強調する政治家による暴力や不正も、また、モハレスが強調する政治家のイデオロギーも、政治家（族）が全国的な政治状況や地域のそれぞれの実状に対応する形で用いてきた様々な戦略なのであって、そのうちの一つの視点のみがフィリピンの地方政治をよりよく捉え得るといえるのではない。このことを踏まえた上で、新地方政府法の施行や地方への産業基盤の分散、さらには海外出稼ぎの広範な展開などによって地方に新たなリソースが流入している状況における、フィリピンの地方政治家（族）の多様な戦略について調査・研究することが、今後必要とされるであろう。

註

- (1) 本書はUniversity of Wisconsin-Madisonの東南アジア研究センターより一九九三年に出版されているが、本稿はアテネ・デ・マニラ大学出版のものによっている。

(2) 本書で用いられているレント・シーキングという用語は、

ブキャナン以下の説明によっている。「レントは、国家が市場への自由な参入を制限することによって人為的な利益を企業家 (entrepreneur) に与えるとき生み出される。……規制を通して市場を制限することによって、あるいは少数の者のみに「資源への」アクセスを与えることによって、国家は独占に対する純粹に政治的な競争を引き起こすことができる。この過程をレント・シーキングと呼ぶ」[1]。

(3) 表題は一九五〇年代のフィリピンの経済的發展に対する社会的制約を表すために、人類学者フォックス (R. Fox) が用いた論文の題名からとられている。

(4) このような彼のいう「家族」という用語が、フィリピン人自身によってどのように表現されているかということは、必ずしも明確にはされていない。従って、ここでいう家族は、フィリピンの政治場において顕著に観察される親族の集合体を、彼が表現しようとした抽象概念である。但し、本書の中でフェガンのみは、彼の論文の中で用いる「家族」は彼の調査した地方の言語 (タガログ語) での *anakang* に相当することを述べている [49]。

(5) スコットは、パトロン・クライアント関係の基盤として、富と権力の顕著な不平等、個人的な自律した権力基盤 (フォーマルな地位の相対的欠如)、親族集団や伝統的村落共同体の欠如を挙げており、これが①社会分化、②植民地国家の浸透、③商業化、によって弛緩していくと論じた [Scott 1972a: 101; 1972b: 17-30]。フィリピンにおいては、弛緩条件のうち②が弱いことに加えて、選挙が実質的に機能を果たして

いることが、パトロンクライアント関係の存続・変質にとって重要となる [1972a: 109]。

- (6) このモデルの影響下にある研究としては、例えば大統領の任命にみるクライアントリズム [吉川 1987]、農村部におけるパトロンクライアント関係の弛緩過程 [Wolters 1984]、集票マシンの登場とパトロンクライアント関係民主主義のインフレの性格の指摘 [Machado 1978] など様々な分野のものが挙げられる。

- (7) この動きには、PCモデルが扱わなかった要素が重要となってきたという政治構造の変化を強調する立場 [cf. Putzel 1995] と、このモデルの影響力ゆえにフィリピン政治における重要な要素が軽視されてきたという立場 [cf. Kerkvliet 1995] があるようにみえる。

- (8) またこれらの事例を、タイにおいて近年、地方の経済発展とともに出現してきた「チャオポー」と呼ばれる有力者などと比較することは、本書のテーマの一つであるフィリピン国家の特質を把握するのに有効かもしれない。チャオポーについては [赤木 1995] を参照。

凡例

- ・「」内に数字しか記されていない引用は、すべて本書からの引用である。

- ・引用内の「」は筆者による補足である。

参考文献

- 赤木 政 一九九五 「チョンブリーにみる地域政治の変容」 北原 淳・赤木政編『タイ・工業化と地域社会の変動』法律文化社
- Coronel, S. 1995 "Cavite: The Killing Fields of Commerce." in J. F. Lacaba ed.
- Kerkvliet, B. J. 1995 "Toward a More Comprehensive Analysis of Philippine Politics: Beyond the Patron Client, Factional Framework." *Journal of Southeast Asian Studies* 26(2): 401-419.
- Lacaba, J. F. ed. 1995 *Boss: 5 Case Study of Local Politics in the Philippines*. Quezon City: Philippine Center for Investigative Journalism, Institute for Popular Democracy.
- Lande, C. 1965 *Leaders, Factions, and Parties: The Structure of Philippine Politics*. New Haven: Southeast Asia Studies, Yale University.
- Machado, K. 1978 "Continuity and Change in Philippine Factionalism." in F. Belloni & D.C. Beller eds. *Faction Politics: Political Parties and Factionalism in Comparative Perspective*. Santa Barbara, California: ABC-Clío.
- Putzel, J. 1995 "Democratization and Clan Politics: The 1992 Philippine Elections." *South East Asia Research* 3(1): 18-45.
- Rocamora, J. 1995 "Introduction: Classes, Bosses, Goons, and Guns, Re-Imagining Philippine Political Culture." in J.F. Lacaba ed.
- Roces, M. 1993 "Book Review: An Anarchy of Families: State and Family in the Philippines." *The Journal of Asian Studies*

53(4): 1322-4.

Scott, J. 1972a "Patron-Client Politics and Political Change in Southeast Asia." *American Political Science Review* 66(1): 91-113.

——— 1972b "The Erosion of Patron-Client Bonds and Social Change in Rural Southeast Asia." *Journal of Asian Studies* 32(1): 5-37.

Wolters, W. 1984 *Politics, Patronage and Class Conflict in Central Luzon*. Quezon City: New Day.

吉川祥子 一九八七 「フィリピンの政治的クライアンティリズム
…大統領の任命権と任命の政治過程」 『東南アジア：歴史と文化』 第一六号。